

[実践報告]

認知症高齢者のコミュニケーションを促進する 作品展示デザインの実践的研究

塚本 万里(株式会社ムラヤマ)

抄録

日本では、1970年代から老人保健施設や通所デイケアなどで美術に関わる活動が行われ、ケアの現場での造形活動はよくみられるようになってきた。しかし、それらにおいて展示までを一連の活動とした研究は進んでいないのが現状である。

本研究では、デイサービスの造形活動での作品展示デザインの実践から、認知症高齢者のコミュニケーションにおける展示の有効性を提起する。まず、アートとケアに関する問題提起として、展示をしなければ得られないコミュニケーションがあること、ケアの現場が閉鎖的であること、ケアの現場での造形活動が展示の視点から述べられてこなかったことを挙げた。具体的実践では、造形活動と日常的な展示、および非日常的な展示(ミニギャラリー)を実施し、エピソード記述と介護者へのインタビューを用い考察した。エピソード記述では利用者の発話や介護者とのやりとりなどのコミュニケーションが、インタビューでは介護者の視点での気づきがみられた。

本研究のまとめとして、次の3点が明らかとなった。1点目に、認知症高齢者の作品展示には、当事者のコミュニケーションを促進させる効果があることである。実践からは、認知症高齢者が展示を通して会話したり、感情を示したりする様子が多数見受けられた。2点目に、展示には認知症高齢者と介護者をつなぐ効果があることである。展示をきっかけに認知症高齢者と介護者のコミュニケーションが発生していた。最後に、展示にはデイサービスとその周囲をつなぐ効果があることである。ミニギャラリーは、認知症高齢者の周囲が施設での活動を知る機会となった。以上のことから、認知症高齢者の作品展示は当事者とその周囲のコミュニケーションを促進することが示された。

Key word

展示、コミュニケーション、高齢者、認知症

1.はじめに

本研究は、老人デイサービスセンターにおける実践から、認知症高齢者の作品展示が当事者とその周囲のコミュニケーションを促進することを明らかにすることを目的とする。日本では、1970年代から老人保健施設や通所デイケアなどで美術に関わる活動が行われており[宇野、2006]、介護の現場での造形活動はよくみられるようになってきた。しかし、それら造形活動において、展示することまでを一連の活動とした研究は進んでいない。デイサービスでの造形活動における作品展示デザインの実践から、介護や福祉の現場でのコミュニケーションにおける展示の有効性を提起する。

なお、本研究は、平成29年度に東京学芸大学大学院教育学研究科に提出した修士論文「認知症高齢者のコミュニケーションを促進する作品展示デザインの実践的研究」をもとに、認知症高齢者と展示の関わりと体験に焦点を当て、追加で考察を行ったものである。

1-1. 研究の背景と動機

(1) 研究の背景

日本の65歳以上の高齢者人口は上昇を続けている。高齢者の割合は2065年には38.4%に達すると推計されており[内閣府、2018]、2016年時点の推定値で平均寿命が男性80.98年、女性87.14年であるが、「日常生活に制限のある期間の平均」は男性8.84年、女性12.34年となっている[厚生労働省、2018]。今後寿命がさらに長くなっていくことが予測される中、高齢者は現時点で平均10年前後の期間を何らかの障害を抱えながら過ごしている状態である。以上のことから、高齢者が制限を持っていても尊厳を保ちながら健康に長生きしていく方法について検討する必要があると考える。

本研究では上記で挙げたように制限を持つ高齢者として認知症高齢者を対象とするが、吉村他[2017]によると、認知症高齢者におけるコミュニケーションについては、複数の認知機能(見当識、記憶、失語など)の障害を有する結果コミュニケーション障害を呈していると考えられ、認知症でのコミュニケーション障害は、本人のみならず周囲の人々にも影響を及ぼしている。そのため当事者とその周囲が意思を相互にやりとりする「コミュニケーション」が重要になると考える。

(2) 研究の動機

筆者は学部在学時に、学芸員資格の取得課程での実習や、大学付属小学校の展示会の学生スタッフ、アートイベントにおけるワークショップでの経験を通して、展示デザインの役割の大きさと魅力を実感した。そこから、前述の背景をふまえ、高齢者施設で展示デザインの手法を活用できるのではないかと期待を持った。その上で、高齢者施設でしばしば行われている作品の制作の先に展示という一段階を加えられるようにするためには、介護者などの施設スタッフが自身で展示を行うことが容易になるよう、展示のための装置作りのメソッド化が必要であると考えたことが、研究の動機である。ただし、展示方法に加え、実践を経て重要性がわかった、利用者が鑑賞するための場づくり、プログラムづくりについても本研究では触れていく。

1-2. 研究の目的と対象

本研究は、認知症高齢者の造形活動における作品展示が、認知症高齢者とその周囲のコミュニケーションを促進する一手段として有効であることを明らかにすることを目的とする。また、対象は「老人デイサービスセンター」を利用する認知症高齢者とその周囲とした。この「老人デイサービスセンター」におけるデイサービスは、介護保険における在宅サービスである通所リハビリテーション(デイケア)および通所介護(デイサービス)の中でも最も利用者が多いサービスの一つである[矢野、2015]。

1-3.用語の定義

本研究における「展示」は、協同的な立場での「展示」を意味する。日本展示学会は、日本展示学会の設立について、「展示自体が『総合的なコミュニケーション・メディア』である」という視点に立った研究の必要性から、1982年に設立されたと述べている。単に「陳列」ではなく、「コミュニケーション・メディア」としての「展示」という定義は本研究における展示の考え方と共通しており、この定義を本研究において使用する。

三村・飯干[2013:p.8]によると、『コミュニケーション(communication)』とは、ラテン語のコムカール(commucare:共有)が語源であるとされ、複数者間で何らかの情報や意思を伝達し、それを共有する活動を指す。他者と共存し社会を構成して生きる我々の生活の基盤をなしている」とされており、援助者や周囲の人など他者との関わりにつながる自己の表現や発信を「コミュニケーション」と定義する。本研究では、健常者がコミュニケーションを取る際に通常行うような言葉を用いた会話だけでなく、仕草や表情、動きなどノンバーバルな表現も含めて「コミュニケーション」とする。

1-4. 本論文の構成

第一章では既に見てきた通りであるが、研究の背景や目的、先行研究の概要、本論文で使用する言葉の定義について述べた。第二章では、これまでの施設での造形活動における展示の概観について述べる。第三章では、認知症高齢者の作品展示について具体的実践を行い、造形活動と日常的な展示、および「ミニギャラリー」と名付け非日常的に行う展示の2つを実施し、エピソード記述と介護者へのインタビューを用い考察する。最後に、第四章で本論文の結論を述べる。

2. これまでの施設での造形活動における展示の概観

2-1. 認知症高齢者と展示の先行研究の概要

これまでの認知症高齢者を対象とした施設での造形活動における展示を概観するにあたり行った先行研究の収集から、認知症高齢者と展示に関する研究が進んでいない現状が示された。伊集院・渡辺・中山[2005]は認知症予防教室で制作後の展示を行ったことに触れている。辻・辻[2017]も鑑賞は重要であるとしている。しかし、そのどちらにおいても展示の具体的な効果については述べられていない。

2-2. 類似の対象と展示の先行研究の概要

1990年代以降、小学校、中学校などの教育機関ではより多様な機会を持つようとする考えにもとづいた「学校美術館」と銘打った学校行事としての展覧会が開催されるなど、展示への取り組みがなされてきた[辻他、2013:pp.31-44]。特別支援を必要とする知的障害の領域における先行研究では、倉知他[2011]が、特別支援学校高等部の生徒と、県立高校芸術類型の生徒が参加し共同して作品の制作を行ったアートワークショップについて、創作活動から展示まで行える拠点の存在が特徴であると述べている。ただし、展示したことの効果については述べられて

いない。また、南雲他[2013]が特別支援学校の生徒と大学の洋画研究室学生が連携して実施した展覧会について、特別支援学校の生徒たちが障害のためになくしかけていた自信や意欲を取り戻したこと、児童・生徒が作品展実施を通して様々な場面で病院関係者以外の人たちとかわることができたこと、展覧会の参観者には重症心身障害の子どもたちの造形活動そのものにも関心を寄せてもらったことを結果として挙げており、展示の効果を示している。

その一方で、介護の場における展示についての研究は、進んでいるとはいえない。作品そのものの制作の延長上に、多様なケアをもたらすための、介護の場における作品展があっても良いはずだ。以上のことから、本研究を行う意義があると考えられる。

3. 認知症高齢者のコミュニケーションを促進する 作品展デザインの実践

本章では、まず本研究での問題提起を行う。次に、研究の手法や概要について述べ、最後に本研究についての考察を行う。なお、文中の「利用者」は施設Aの利用者である認知症高齢者、「介護者」は施設A職員を示す。

3-1. 認知症高齢者の作品展の実践における問題

本論では3点の問題提起を行う。まず1点目は、作品制作後の展示を行わなかったことで得られなかったコミュニケーションがあることを問題として挙げる。認知症の症状として、コミュニケーションが円滑でなくなるという症状がみられやすいが、この症状に対して展示は効果的であると考えた。2点目は、介護の現場が閉鎖的であることだ。中でもとりわけ認知症高齢者は、認知症に対するネガティブなイメージを持つ家族の意向や、外出のリスクや困難さへの配慮から、家や施設などにこもりがちである。展示を行うことで新たな場づくりを行い、その場に施設外から人が訪れることで、介護の現場を開くことができると考える。3点目に、介護の現場における造形活動が、展示の視点から述べられてこなかったことを挙げる。臨床美術やアートセラピーなどの領域では、展示することには重点を置かれておらず、造形活動と作品展が乖離している。稲庭[2012]によれば、アメリカでは認知症高齢者の展覧会鑑賞がアクセスプログラムとして行われている。しかし、日本ではまだそのような例は少ない。その上、美術館における鑑賞は、認知症高齢者が日常を過ごす施設での実践ではなく、当事者自身の作品が展示されるという実践でもないため、足の運びやすさと鑑賞のしやすさの両面でのハードルがある。そのため、本研究で高齢者にとって日常的な空間である施設における展示を扱うことには意義があると考えられる。

3-2. 研究の手法と考察

日頃から利用者に接している介護者からの意見を得ながら、実践による研究を行った。施設の居室などを用いながら行う日常的な展示と、「ミニギャラリー」と名付けイベントとして非日常的に行う展示を実施し、以下の手法を用い考察した。

(1) エピソード記述

関与観察、ビデオ記録、ICレコーダーによる録音をもとにしたエピソード分析を行った。質的アプローチの一つであるエピソード記述[鯨岡、2005]は、認知症高齢者という相手と関わりながら現場での実践をする上で適切な手法であると考えた。なお、筆者は基本的にファシリテーターで、活動の当事者でもあるため、エピソード内では「筆者」ではなく「私」と記述している。

(2) インタビュー

介護者のインタビューから、利用者の感情表出や発語が増えるなどの変化があるかを抽出した。また、活動を通じた利用者との関わり方や、課題についても介護者からの意見や回答を得た。なお、インタビューは、実施の目的と守秘義務に関する説明を行った上で同意を得た。インタビューの記録には、筆記に加えてICレコーダーによる録音を用いている。なお、本研究は調査協力者および情報提供者に了解を得た上で行った。また、利用者をはじめとする関係者のプライバシーの保護のため、施設の介護者との協議の上、氏名および機関名(施設A)を匿名表記している。掲載写真については全て筆者撮影であり、写真の撮影や掲載については被写体と施設Aに承諾を得ている。その上で、プライバシーの保護のため写真のトリミングやぼかしの加工を行うなどの配慮を行い掲載した。

3-3. 実践の概要

(1) 造形活動と日常的な展示

造形活動とその後の展示の実践を、2017年1月から12月までの7回行い、エピソード記述による考察を行った。

1) 1月X日 ミニ版画

a. 概要

小学校の図工などでも扱われる題材をヒントにした、スチレンボード版画の制作を行った。和紙に何枚か色を変えて刷り、最後に気に入ったものを1枚だけ選び、筆者が用意してきたスチレンボード製の簡単な額に入れて飾った。利用者12名中9名が制作に参加、介護者は4名だった。

b. 背景

額に入れて展示することによって得られる変化や効果を見てみたいと考え、提案した活動である。中でも版画を選んだのは、サインを入れるのが自然な作品であることが大きな理由である。サインについては、すぐに以前したことを忘れてしまいがちな利用者が、作品にサインを入れておいたことで後日展示したものを観たときに自分の作品を見つけて楽しめた事例があったことを聞いていたので、その効果を期待した。

c. 全体の様子

穏やかな雰囲気での制作が進み、集中して取り組む利用者が多かった。全体の様子に関しては、初回だったことから筆者自身が進行することに気を取られ、あまり広くみられなかった点が反省点であった。

d. エピソード1:参加しない参加

E男さんは、席には座っているものの作ろうとする様子がなかった。そこで、「一緒にやりませんか?」と声をかけてみたのだが、「やらん」と言う。介護者も誘うが、「いやいや」と手を振って制作しようとしなない。無理に参加してもらうのも良くないと思い、以降は私も声をかけなかった。ただ、制作はしないが、周りが制作を進める中で席を離れることはせず、隣にいる妻のE子さんに話しかけたり周りの様子を見たりしている。制作していないのに楽しそうにしているのを、私は不思議に思った。しかし、活動終了後に介護者b、介護者cは「自分は作っていないのに、ずっとお母さん(E子さん)の作られる姿を見て話したり、にこにこしたりされていたよね」「普段はお母さんの方がはっぱをかけているという感じだけど、今回は逆だったよね」と楽しそうに話していた。後日、別の活動日に「その後どうでしたか?」と展示してからの普段の様子を聞いてみると、介護者bの表情がパッと明るくなり「E男さん、作品制作はしなかったんだけど、次の週に来たときに飾ってあるのに気づいて、近くまで行ってお母さんの作品をじーっと見ていたの」と言う。さらに、「お母さんのところへすーっと行ってね、肩をトントンとして、うちのが作った、と(介護者にアピールするように)言っていたのよ」と笑って話す。その様子に、あれで良かったんだ、と嬉しさを感じた。

e. エピソード1の考察

E男さんが参加せず時間が過ぎていってしまったことに対する焦りと不安感から、筆者は活動後もE男さんが気になっていた。そんな中で後日介護者から聞くことのできたE男さんの様子に、筆者は安堵している。介護者の話す様子や表情からは、参加しなかったE男さんや、筆者に対してネガティブな思いを抱いているわけではないということも感じ取れた。E男さんは、展示した作品への興味を作った本人よりも強く持っていたのかもしれない。制作という形では参加していなくても、同じ空間を共有するという形で「参加」する、ということが介護者の視点からは成り立っていたことを実感できたエピソードとなった。

2)2月X日 粘土でつくるオブジェ

a. 概要

粘土のかたまりを握って、好きな形を作るという活動を行った。形ができれば、そのかたまりに竹串を刺して軸となる部分をつくり、その後、絵の具を1~2色選んで粘土のかたまりにスポンジで塗っていく。完成したら、粘土に支柱と発泡スチロールの立方体片で土台をつけて仕上げ、リズム感を持たせながら並べ、展示した。利用者9名中8名が制作に参加し、介護者は3名だった。

b. 背景

前回の版画の活動の際に、「次回は立体がやりたい」と介護者から意見が出ていたため、立体かつ扱いやすい素材として、紙粘土を使うことにした。支柱と発泡スチロールの立方体片でオブジェのように土台をつけることで、作品らしさが出てくることを期待した。粘土をにぎるという利用者誰もが取り組めるところから始めて、次第に思い思いの形をつくるという活動に移行していくことを期待した。

c. 全体の様子

前回と比較すると人数が少なく、じっくりと取り組めた。また、筆者自身も前回で雰囲気をつかめたこともあり、利用者の反応を気にしながら進めていくことができ、会話をしながら穏やかな雰囲気で作成した。叫んでしまったりものを投げてしまったりするためにテーブルを離しての着席となった利用者が1名いたが、介護者とのやりとりの中で制作に参加してもらうことができた。

d. エピソード2: Bさんの人生

この日の活動では、Bさんは積極的に輪に入るわけではなく、テーブルの端に着席して制作を始めた。誰と話すわけでもなく一人でもくもくと作業をしているようにみられたが、途中までは他の利用者と同じように粘土で形をつくっていた。しかし、支柱と粘土を接着し、台座をつけたところで粘土の形状がやや崩れた。そこで、Bさんは粘土を支柱に巻きつけるようにして形を作り始めた。その後、形をつくりながらスポンジを使って絵の具で色を付けたところで手を止めた。その姿は一旦作ることから離れて、何か考え込んでいるように見えた。そこで私は「これは何の形ですか?」と話しかけてみた。すると「これは、私の人生を表しているの。山あり谷あり、まっすぐにはいかないのよ」と粘土のぐねぐねとした部分を指差しながら話し始めた。そして、介護者に「白い紙をちょうだい、何でもいいの」と言った。介護者がA4サイズのコピー紙を取ってきて渡すと「この上に載せたいの」とそれまで作っていたものを載せ、ちょうど良い位置を探りながらボンドで固定した。できたものを満足するように眺めると、絵皿として使用していた紙皿を「後ろに貼りたいのよ」と言い、ボンドで固定しようとし、横から介護者もそれを手伝った。さらに、絵の具を塗るために使用していたスポンジも、「ここがいいわねえ」と左下にボンドで貼って、作品が完成した。

e. エピソード2の考察

筆者は、前回の活動の様子をふまえ、Bさんとの関わり方に難しさを感じていた。そのため、Bさんが積極的に制作をし始め、表現したいという気持ちを感じられたことに驚きを感じて、Bさんの姿に注目したいと考えた。白いコピー紙を下に敷いたという点や、背景をつくるように紙皿を後ろに立てた点は、他者に見せるため、展示のための「しつらえ」を自ら行ったように、筆者には見えた。また、コピー紙を配置することは、正面がどこかということの意思表示でもあったように思われた。介護者によると、Bさんはここ最近の様子だと、うつ気味であまり明るい様子がみられていなかったという。しかしそれを感じさせないほどの生き生きとした姿からは、Bさんの中で考えがめぐったことで思いが発語につながっていたように感じられた。「展示する」という意識を筆者が強く持って「型」をつくったからこそ、それを崩すという発想がBさんに生まれたのではないかと感じている。

3) 3月X日 桜のオーナメント

a. 概要

施設の倉庫にストックのある和紙を使った活動をしたいという介護者の要望を受けて考案した、桜をモチーフとした飾りである。使いたい和紙をちぎり、それを貼り付けて桜の花を作った後、さらにその花のパーツを麻紐に一定の間隔を空けて5~6個貼り付けた。花と花の間には葉も付け、一連の作品となるオーナメントを制作した。制作後は、しだれ桜のように作品を吊るして飾った。利用者4名、介護者2名での活動となった。

b. 背景

これまでの利用者の様子を観察する中で、利用者が制作をする際に、立ったり座ったりすることや手を動かすことなどについて、可動範囲が極めて狭いということに気づかされたため、今回は小さなパーツを組み合わせていくことで完成するオーナメントを制作することとした。1人5～6つの花で一連とするが、それをさらに組み合わせることでボリュームが出るものとなることを意図した。素材の和紙は、以前から創作活動の際に施設でよく使用されており、利用者と介護者の両方にとって馴染みもある。そのため、和紙素材での題材を提案したいと考えて選定した。

c. 全体の様子

利用者の人数が比較的少なかったこともあり、穏やかな雰囲気で行った活動だった。途中からは介護者も制作と一緒に参加した。ちぎる作業や並べて貼り付ける作業など、個別の単純作業が多かったが、同じように作ったことで個人によって差が出る面白さのある作品となった。

d. エピソード3

Rさんは症状の進行からなのだろう、会話によって思いを伝えることが難しく、私はコミュニケーションをとることに困難さを感じていた。私が個別の声かけをしても、Rさんの思いが理解できるような返事や反応が返ってくることがなかった。

制作が進み、麻紐に花のパーツを4つ貼り付けたところで、Rさんは制作していた手を止めた。そして、制作途中の作品の麻紐の上端を持つと、そのまま右手を挙げ、自分の手から下がる作品の真ん中辺りをじっと見た。その様子に気づいた介護者fが「いいねえ～」と言う。するとRさんは嬉しそうに顔をくしゃっとさせながら、片目をつぶって作品を見ている。そのまま30秒ほどずっと、腕の位置を維持しているので、私は驚いた。Rさんにそのような力があるようには見えなかったからだ。介護者eも「まだ持ってる」と言いながら、隣でRさんと同じように作品を掲げてみるなどするが、それでもまだRさんは腕を降ろさない。それを見て、介護者eは「Rさん、まだ持ってるねえ」と声をかける。そのうち、腕が疲れてきたのだろう、Rさんが腕を下ろすか上げたままにするかを迷うかのように、一瞬だけ腕の位置を下げるそぶりを見せると、介護者eは「Rさん、まだまだ、まだまだ」と言って笑う。Rさんは、今度は苦笑いするように左目を素早くパチパチと開いたり閉じたりして、しかし楽しそうにしていた。

Rさんはその後も何度か、腕を下ろしてはまた上げるという動作を繰り返した。それに触発されるように、介護者eと反対側の隣に座っていたBさんが作品を持って腕を上げてみたり、向かい側にいたMさんが椅子の端を持って立ち、作品を掲げてみたりしていた。

e. エピソード3の考察

普段の生活の中では、利用者は立ったり座ったり、体のどこかを動かしたりすることに積極的ではないことが多いように筆者は感じていた。中でもRさんは発話が少なく、どのような感情を持って制作に取り組んでいるのか、何か考えていることがあるのか、筆者は特に気になっていた。Rさんが腕を伸ばしたり立ったりする動作を行うことができたのは、作品の特性である「吊るす」ということをきっかけにしてのものだろう。Rさんに影響されて、他の利用者も腕を伸ばして作品を見ていたのも、利用者が複数人いたからこそ得られた効果だったのではないだろうか。

4) 10月X日 野菜・果物の立体作品

a. 概要

新聞紙をまるめたりねじったりして作りたい野菜や果物の形をつくり、テープで固定した後にちぎった和紙をまわりに貼って制作した。必要に応じて、芯やヘタをつけるなどとした。モチーフとなる野菜と果物(さつまいも、柿、りんご、かぼちゃ)は筆者が用意した。今回は利用者6名、介護者3名での活動となった。

b. 背景

前回までの活動では、制作後にすぐに作品を撤収させ、後日改めて作品の展示を行っていた。しかし、後日展示されてからでは作品と自分との関わりを再度思い出すことが難しい利用者も多く、制作した後の展開があまりみられないことを課題に感じていた。そのため、今回は制作してそのまま室内に展示するという形をとることで、以降の活動の広がりを期待したいと考えた。

c. 全体の様子

想定よりも人数が少なかったことから、用意していた野菜や果物を利用者が1人1つ選び、手元に置いてじっくり観察しながら制作することができた。食べ物がモチーフだからか、それをきっかけとした制作中の会話もはずみ、利用者の表情も穏やかであった印象である。途中から介護者3名も制作に参加し、筆者が用意していなかったみかんや青りんご、さんまをそれぞれ作るという展開もあった。作品が完成すると、利用者が立って壁にかけてあるかごに作品を入れ、鑑賞した。

d. エピソード4:リンゴの唄

テーブルの上に私がかごを持ってきてから、しばらく「いいねえ」「食べ物はいいいねえ」と利用者との間で会話がはずんでいる。しばらくして、介護者eが「りんごと言えば…『リンゴの唄』がありますねえ」と言う。すると「そうねえ」「いいですねえ」と利用者が嬉しそうに言い、盛り上がる。そこで介護者eが「歌ってみましょうか」と、言うと、歌の本を取り出した。本を配り終え、リンゴの唄のページを開くと「さんはい」という介護者eの掛け声に、利用者は「♪赤いりんごに口びるよせて～」と合唱を始めた。

2回ほど繰り返して歌い終わると、介護者eが「他に秋の食べ物の歌、ありますかねえ」と聞くと、利用者は作品を観ながら口々に「うーん」と言って悩み、Jさんは「ないですねえ」と言う。介護者fが「おいしい歌や柿の歌はないねえ」「あってもよさそうだけど」と言うと利用者は皆「ねえ」「そうだねえ」と相槌を打っていた。

e. エピソード4の考察

利用者と介護者eが作品を観ていたところから発展があり、私にとっては想定外の展開になったことが驚きだった。作品を囲みながら皆でリンゴの唄を歌うことで、作品のリンゴにもう一度思いをはせることができていたのではないだろうか。リンゴの唄を通して、自分の若い頃を思い出した利用者もいただろう。作品の展示が、作品自体だけで終わるのではなくさらに歌という別のものに展開していったことが嬉しく、それまでの作品が作品で終わってしまうという筆者が長く持っていた課題感をようやく打破できたような思いがあり、印象に残っている。

f. エピソード5:Jさんのおいも

制作後はいつも、午後のおやつ時間となっている。この日のメニューは偶然いもようかんとなっていた。そこで、介護者bが「今日のおやつはいもようかんです、Jさんのおいもでつくりました～」とニコニコしながらおやつを持って登場した。Jさんをはじめとする利用者は、アハハと笑いながらおやつを受け取った。

おやつを食べ終わると、利用者皆でテーブルの上の作品を眺めた。私が「Jさんのおいも、おいそうですねえ」と言うと、介護者eが「おいもは何に使ってもおいしいですよ～」と言い、Jさんも「そうですねえ」と応える。そして、介護者や利用者が口々に「ふかしてもいいし」「おいもご飯とか」「スイートポテトもねえ」と言い盛り上がった。

i. エピソード5の考察

おやつがいもようかんだったことから、Jさんの作っていた作品と関連させるように介護者bが発言し、それが利用者の笑いにつながった。利用者はその日のおやつはいもようかんが、Jさんの作品のいもからできているわけではないことをおそらく全員理解している。介護者Aも、その冗談を判別できるメンバーであることをわかり、また利用者とも日々の信頼関係を築いた上でこの冗談を言っているのだろう。だからこそ利用者も筆者も、介護者bの発言に笑うことができたのではないだろうか。

5)12月X日 ランチョンマット

a. 概要

B4サイズの画用紙に絵の具とスポンジなどでスタンプしたり、色紙や紙テープを貼ったりして、ランチョンマットを制作した。制作したものは、絵の具が乾き次第B4サイズのPP透明袋に入れ、ある程度の水に耐えうる、使えるものとして仕立てた。利用者5名、介護者3名の参加だった。

b. 背景

前回までの活動をふまえて、作品制作後の鑑賞を制作以外の日々の生活とどれだけ結びつけられるかが展示デザインのポイントだと思うようになった。特に「野菜・果物の立体作品」の回には、つくったものと歌やおやつとの結びつきがあったことでその後の盛り上がりがあったように感じられた。そのため今回は、制作後の活動であるおやつと自然につながる作品にしたいと考え、ランチョンマットを制作することとした。

c. 全体の様子

初めは「何をやっていいかわからない」という利用者がいた。Jさんについては、開始直後だけでなくいくつかの作業を終えてからも、次にしたいことが見つからず「どうしましょうかねえ」と混乱している様子がみられた。手順と、素材や画材の選択肢が多かったことと、1つの作業をした後にその後の展開を想像するのが難しかったことが原因となっていたように思われる。意図的にモチーフを思い浮かべやすい素材を用意しなかったのだが、それが制作のしづらさにつながってしまったということなのだろう。しかし、その分介護者や私とのやりとりも多く、雑談もはずんだ活動にはなった。

d. エピソード6:F夫妻

おやつの時間になり、介護者fがこの日のおやつ、どらやきとお茶を持ってきた。制作にも参加していた介護者fは、「順番こに…。じゃあ、F子さんの上に置きますね～」と言ってランチョンマットの中に描かれたF子さんの名前上にお茶を置くので、利用者も私も笑った。続いて「じゃあF男さんのところに」とF子さんの隣に描かれたF男さんの名前の上にどらやきの入ったお皿を置くので、さらに皆大笑いである。「いい感じですよ～」と介護者fは言い、他の利用者への配膳を続けた。おやつを食べ終わってしばらくして皆で談笑している際に、私はF子さんの隣に座っていたので、ランチョンマットの名前の部分を指差して「おふたりでこっちとこっちでおやつ食べられますね」と言ってみた。するとF子さんはボソッと「…焼酎かな」と言うので、私は予想外な回答に驚き、少し大きな声で「えっ?焼酎?」と思わず言う。すると、テーブル全体から笑いが起きた。そこで「おふたりで、こっちとこっちで焼酎ですか」と聞いてみると、F子さんは「私はアルコール飲めないの」と言う。そこで、介護者dが「F子さん何のむんだっけ?」と聞くと、F子さんが「オレンジジュース」と言うので、私は焼酎とオレンジジュースがこのランチョンマットの上に並んでいる様子を想像し、そのギャップに笑ってしまった。F子さんも、淡々と答えているのだがこのやりとりが面白いようで、少し笑っている。今度は介護者dが「F男さんどういの飲むの?」と聞く。「○○とか△△とか」と銘柄をF子さんが言うと、介護者dが「芋焼酎か」と応え、介護者bも「□□芋焼酎とか～」などと言って盛り上がっていた。

e. エピソード6の考察

介護者fがランチョンマットと関連させながらおやつを置いていったことで、その後の会話が展開した。おやつを持ってきた際の介護者fの発言があったことで、F子さんも再度作品を評価されたような気持ちになったのではないだろうか。これまでのおやつの中には、食べるものがなくなると話題が尽きてしまうことが多く、同時に無表情になったり言葉を発することがなくなったりする利用者が大半だった。しかし今回は食べ終わってからも目の前に観る作品があったため、F子さんのような話の広がりが出てきたと考えられる。

制作後の時間にそのまま使えるものを制作したことで、活動を分断しないで次の活動に移りつつ、鑑賞に自然に結びつけるという点で、スムーズさがあったことが感じられた時間であった。

8) 小結

造形活動とその後の日常的な展示の実践においては、前半と後半で展示のあり方を大きく変化させた。前半では、造形活動を行い作品を完成させてから、後日改めて展示を行うという形式をとっていた。これは、作品をきちんと乾燥させるなどの工程を経てから、見栄えのするような一手間を加えて展示することが、認知症高齢者のコミュニケーションを促進させるのに効果的なのではないかと考えていたからである。実際に、「エピソード1:参加しない参加」のように、後日展示を行ったことで利用者の発話や利用者同士、利用者介護者の間のやりとりが発生するという効果はあった。しかし、中には1、2日経ってしまっただけで、室内に自分の作品があってもそれを作ったことを思い出せなくなってしまう利用者もあり、一旦利用者から作品を離してその後また鑑賞できるように展示するのは適切でないのではないかとということが前半の実践の中でわかってきた。

そのため、後半は制作後にそのまま作品を展示し、鑑賞するという形式に活動の仕方を変化させた。

展示デザインとしての表面的な見栄えの良さというよりも、利用者の制作した感覚を維持させながら楽しんでその後の展開が期待できる展示となるよう、大切にする視点を変えた。すると、利用者だけでなく介護者による展開もみられ、コミュニケーションの促進に効果的であることが示された。このことから、施設における展示デザインのあるべき姿が見えてきた。

また、「野菜・果物の立体作品」のように、季節を絡めた作品を制作しすぐに展示を行うことで、認知症の療法であるRO法の手段としても展示デザインを展開させることができた。認知症になると、季節や自分の居場所がわからなくなるなど、現状を把握できなくなる症状が現れることが多いが、展示はその症状に対する療法のツールにもなり得る。RO法について山根[2012]は、本来の目的は見当識障害の進行防止や改善であるものの、認知症の初期段階ではある程度有効だが、病状が中程度となると改善に効果的であることは明らかではなく、実際には季節や日時など生活に関することを介してお互いに生まれるコミュニケーションが大切であると述べている。

「ランチョンマット」では、筆者がファシリテーターとなって行った活動から、クリスマス会用に介護者がアレンジして再度制作の機会を設けるという展開があった。介護者がファシリテーターとなっての実践をしてもらったことで、より利用者や介護者にとってやりやすい活動へと発展した。



図1 エピソード1



図4 エピソード4



図2 エピソード2



図5 エピソード5



図3 エピソード3



図6 エピソード6

(2)非日常的な展示

非日常的な展示は、「ミニギャラリー」と名付け、施設内の共有スペースにて実施した。実施にあたっての広報は、チラシを作成し、利用者の家族と施設関係者を対象に配布することで行った。その他の紙媒体としては、作品タイトルと介護者による作品コメントを載せた目録を作成し、当日会場の入り口で来場者に渡した。展示のしつらえについては、譜面台に「ミニギャラリー」と文字を入れたポスターを貼って看板にして置いた他、スチレンボードで作成したキャプションの設置も行った。キャプションにはタイトルと目録と共通のコメントを掲載した。あいさつパネルは、介護者との相談の上で介護者の負担を増やすというマイナス面の方が大きいと判断し、今回は制作しないこととした。展示の構成は基本的には制作順としている。BGMは事前の用意はしていなかったが、介護者aからの提案で、当日穏やかなクラシックの曲を流したところ、雰囲気作りに効果的であった。

1)11月Y日 ミニギャラリー当日

a. 背景

利用者の家族を対象に行われる家族会で、1年間分の作品を展示するミニギャラリーの場を設けた。家族会は半年に1回程度行われており、家族は7名の参加があった。家族会の内容は普段の生活に関する説明や体験が主なものであった。作品展示の試みをするのは初めてで、ミニギャラリーは家族会の前後を中心に、家族が自由に観られるようにしていた。家族会は午後からの開始だったため、利用者には午前中に鑑賞してもらった。

b. 全体の様子

利用者皆で展示してある舞台上上がると、「これみんなで作ったよね」「Jさんのあるよ」「これKさんじゃない？」などと介護者が声をかけた。すると、Jさんは「これ私が書いたんですか」と驚き、「素敵ですね」と言う介護者eに、「そうか忘れちゃった」と言いながら微笑んでいる。その後は皆で粘土の作品を囲んでみるなどして、楽しい雰囲気の中で鑑賞の時間を過ごした。

c. エピソード7:歩いて鑑賞するBさん

Bさんは、歩く際に不安があるため、杖をついた上で介護者dに付き添われながらではあるが「楽しませてくださるのね」と嬉しそうに言いながら鑑賞している。介護者dもそんなBさんに「そうですね」と相槌をうちながら一緒に観ている。そんな中、介護者dが「上もむけますか?あれ見てください」と言い、上に展示してあるタペストリーを指差した。それに反応し、Bさんはゆっくりと上を見上げた。そしてタペストリーを見つけると、「ああ本当に」としみじみと言い、続けて「皆さんで作ってくれて綺麗にできていますね」と感想を述べている。隅々まで観るように目線を動かしながら「それで配色がまたね」とBさんが言うと、介護者dも「そうですね、いい配色をしていますね」と返していた。

しばらく介護者dと一緒に鑑賞し、一通り観終わると、杖をついて階段を降りようとした。さすがに自力で降りるのは危ないと介護者dは判断したのだろう、すかさず腕をぎゅっと抱えて補助をし、無事Bさんは階段を降りることができた。その後は、介護者に「Bさん座りますか」と椅子を差し出されるが、「私はいいわ」と言い、嬉しそうに「いいものを観せてもらったわ〜」と、ときおり手を叩くなどしながら介護者dとともに部屋に戻っていった。

d. エピソード7の考察

Bさんは利用者の中でも一際熱心に鑑賞している様子があり、筆者の印象に残った。立っていることや歩くことを負担に感じているのか、すぐに座って少し離れた椅子から眺めている利用者もいる中、Bさんは杖をつき補助を受けながら、5分以上にわたり立って、歩いて楽しそうな様子で介護者と会話をしながら鑑賞していた。この時のBさんの姿については、その後介護者の間で話題になっており、筆者以上の喜びや驚きといった感覚が介護者からは感じられた。

2) 小結

実践の中では、Bさんが生き生きとした様子になっていたように、認知症高齢者の発話や表情の変化がみられ、展示がコミュニケーションの促進に効果的であることが示された。また、認知症の療法である回想法の視点では、展示した作品の鑑賞を通して利用者が昔話をするというものもあった。回想法について金子[2007]は、「自伝的記憶を用いることは、本人の残存機能を最大限に活用したコミュニケーションのあり方」と述べている。三村・飯干[2013:pp.92-93]によると「人生を回想することにより、人生の再評価やアイデンティティの強化を促進する治療方法」でもあり、近年回想法とRO法の併用をすることで知的機能の維持・向上や、情動の安定を認めたとする報告が増えてきているとされる。

(3) インタビュー

ミニギャラリー実施後、1～2週間の時期に、介護者からのインタビューを得た。インタビューでは、介護者の視点からミニギャラリーおよびそれまでの全体の活動を振り返ることや展開を考えていくことを狙いとしている。

介護者fによると、「Bさんは体が思うように動かず息がすぐにあがってしまうので、いつもは『ここから見えるからいいわ』とか言って動かないときがある」そうだが、ミニギャラリーの際には「(介護者の)『Bさんの作品じゃない?』という声かけに対して『あらほんと』と言ってスタスタと階段を上っていった」ということである。また、表情が良かったという声もあり、介護者aからは「単純にきれいなもの、美しいものを観る、ということだけでも意味がある」が、美術館などに気軽に行くことは難しく、その代わりとしての役割が果たせているのではないかという意見も出ており、非日常的な展示に意義があることがわかる。

その一方で、介護者cから「自分の名前はみんなミニギャラリーで探していた。探さないと、ほとんどみんなどれを作ったかは覚えていない」、介護者bから「Jさんは、これ作ったんですね、などと言ってにこにこするけど、覚えていなくて周りの雰囲気に合わせているところがある」という声があるなど、展示の際の注意点につながる意見も挙げられた。筆者が実践を行っていたことについては、介護者aは「医務室とか、他の施設の職員さんたちが、今来ている人だれ?と気にしていた。そういう人(筆者や他の学生)たちの助けがあるのね、と知りつつあれを見ていてくれた」と述べており、周囲が活動に興味を持っていた様子も読み取れる。実際に筆者も、他施設職員の方から作品の作り方について聞かれるなどしており、活動の広がりを感じる場面があった。

活動の後半に、制作後にそのまま作品を展示し、鑑賞するという形式に活動の仕方を変化させたのは前述した通りであるが、介護者aが、それまでしていた活動から次の活動に移る際について「雰囲気を一気に変えないことが大事。雰囲気を残しておくことで悪い意味での混乱を防ぐこと

ができる。前にしていたことの雰囲気を残しながらゆるやかに変化していくことができればそれが一番良い形です」と述べるように、展示の仕方を変えることでリロケーションダメージの軽減という効果も得られたことがインタビューからわかる。認知症高齢者は環境の変化に弱いが、レクリエーションなどの場合は、活動の後にすぐに片付けて場面転換がされてしまうことも多い。筆者の実践においても、前半の活動の際には制作後すぐに片付け、そしておやつの時間になってしまっていた。後半の活動で、活動後そのまま同じ室内の利用者の目の届くところに展示したり、テーブル上に配置したりしたことで、おやつを食べたりお話をしながら制作をした実感を持って作品を鑑賞することができるようになった。特に、「野菜・果物の立体作品」の回には、制作後にそのまま居室内に配置したかごに作品を利用者自身の手で展示し、そのままおやつに入ったことで、モチーフにまつわる歌を歌ったり、料理の話に展開したりした様子があった。展示そのものの移動も容易だったため、そのままおやつの後までだけでなく、後日も居室での展示が継続されていた。このように展示を用いてゆるやかに環境を変化させることが、認知症高齢者にとって相性の良い場面転換となっていたことが介護者へのインタビューにより示された。以上の介護者へのインタビューから、介護者の視点から見た利用者の反応や普段と比較した場合の変化が示された。



図7 エピソード7

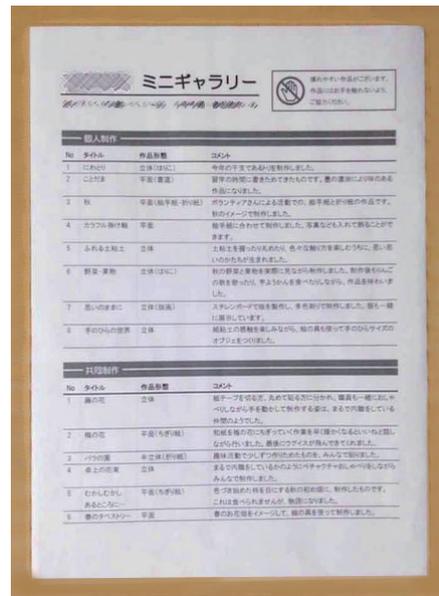


図9 目録



図8 チラシ

4. 認知症高齢者のコミュニケーションを促進する 作品展示デザインの提案

1. 結論

本研究で明らかとなったのは、次の3点である。

まず、デイサービスにおける認知症高齢者の作品展示は認知症高齢者のコミュニケーションを促進させる効果があるということである。実践からは、認知症高齢者が展示を通して会話したり表情やジェスチャーで感情を示したりする様子が多数見受けられるという結果が得られた。

次に、コミュニケーションツールとなり、認知症高齢者当事者と介護者をつなぐ効果があることである。実践から、展示をきっかけに認知症高齢者と介護者のコミュニケーションが発生する様子が多くみられた。作品を通してのコミュニケーションとなることで、普段のおやつの時間などで雑談とは異なる認知症高齢者の一面がみられた。

最後に、デイサービスとその周囲をつなぐ効果があることである。ミニギャラリーは、家族やボランティアが認知症高齢者の作品を鑑賞することで、施設での活動を知る機会となっていた。共有スペースを通る機会のある施設Aと同じ建物内にある他施設の利用者や職員が通りすがりに鑑賞している様子もあった。

以上のように、認知症高齢者の作品展示は認知症高齢者のコミュニケーションを促進させる効果、コミュニケーションツールとなり認知症高齢者当事者と介護者をつなぐ効果、デイサービスとその周囲をつなぐ効果の3つがあることが、本研究により明らかとなった。

2. おわりに

認知症高齢者を対象とした展示デザインの理想的なあり方として、筆者は当初、作品の制作の先に展示を加えられるようにするためには、展示のための装置作りのメソッド化をすることが何より大切なのではないかと考えていた。しかし、施設における展示では、それ以上に制作後すぐに制作者である利用者が鑑賞できる場づくり、それが可能なプログラムづくりをするということが重要であると言えるのではないかと実践を経た現在は考えている。時間をかけた展示のための装置作りをすることは、介護の現場には合っていない。リアルタイムでさまざまなことが起きる現場にいる介護者が、展示のための時間を別に設けることは今回の実践の場であった施設Aでは難しく、それは他のほとんどの施設においても言えることであるだろう。また、忘れてしまうという特性を持つ多くの利用者にとって、ミニギャラリーのように時間を切り離して観る展示に当事者意識を持ち続けることは極めて困難なことである。今回の実践においても、非日常的な展示(ミニギャラリー)よりも日常的な展示の方が、利用者や介護者にとっては理想的な展示デザインのあり方であったと考える。その一方で、施設の外側に向けた展示としては、ミニギャラリーのような展示も必要なのではないだろうか。

本研究での実践を経ての、施設Aのその後について少し触れておきたい。ミニギャラリーを終えてしばらくして、実践に関わっていた介護者から、施設の敷地を使ってイベントを開きたいという声が出てきた。そこで、他の介護者も巻き込み、造形ワークショップやカフェなどを設けたイベントを施設の中庭で実施した。その際には、施設を異動になった職員がイベントに運営として関わったり、地域の方の他にも他施設の職員や利用者も見に来たりと、施設の枠組みを超えてクロスオーバーな関わりも見えた。実践をふまえて、介護者にも実感や手応えがあったことがわかる

展開で、今後も何か続けていきたいという意欲を持っている介護者も多い。

2018年3月には「共生型サービス」が施行され[厚生労働省、2017]、福祉施設が従来の対象者以外にも施設を開き、地域とつながる必要性がますます求められている。これからの介護の現場におけるケアについて、広井[2000]は主に医療や福祉を中心とした職業の従事者同士の構造に対して、越境が必要であるということ述べている。しかし、今後はそれだけでなく、さらに普段ほとんど医療や福祉の領域に接することのない職や他ジャンルも分野を「越境」し、広井の述べる「ケア」の場である介護の現場に関わっていくことが重要となるのではないだろうか。筆者自身も、今後も「越境」する視点を持って、ケアの現場に関わっていきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、東京学芸大学教育学研究科美術教育専攻 環境・プロダクトデザイン研究室教授 鉄矢悦朗先生には指導教官として終始熱心なご指導をいただきました。ここに深謝の意を表します。また、副査としてご助言をいただきました美術教育研究室准教授 笠原広一先生、並びに、グラフィックデザイン研究室准教授 正木賢一先生に感謝いたします。実践においては、施設Aの職員の皆様、ご利用者の皆様にはひとかたならぬお世話になりました。ありがとうございました。日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた環境・プロダクトデザイン研究室の皆様にも、感謝いたします。本研究にご協力いただいた皆様へ、心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

参考文献

【書籍】

三村将・飯干紀代子『認知症のコミュニケーション障害 その評価と支援』医歯薬出版株式会社、2013.

灰田宗孝『「認知症」とはどんな病気?—「認知症」の正しい理解のために—』東海大学出版会、2005.

川島みどり『イラストで理解する初めての介護—心と技術—』中央法規出版、2011、pp178-180.

宇野正威『認知症読本 発症を防ぎ、進行を抑え、地域で支える』星和書店、2010.

小川敬之・竹田徳則編『認知症の作業療法 エビデンスとナラティブの接点に向けて』医歯薬出版株式会社、2009.

日本精神神経学会『American Psychiatric Association Practice Guidelines 米国精神医学会治療ガイドライン アルツハイマー病と老年期の痴呆』医学書院、2002.

鯨岡峻『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会、2005.

金子健二編『改訂新版 臨床美術 認知症治療としてのアートセラピー』日本地域社会研究所、2007.

広井良典『ケア学 越境するケアへ』医学書院、2000.

【論文】

宇野正威『認知症の非薬物療法 芸術療法—美術療法と音楽療法—』老年精神医学会『老年精神医学雑誌』2006、pp.749-756.

橋本修二「健康寿命の全国推移の算定・評価に関する研究」厚生労働省『健康寿命及び地域格差の要因分析と健康増進対策の効果検証に関する研究』2018、pp.16-17.

吉村貴子・岩田 まな・斉藤 章江・植田 郁恵・大沢 愛子「認知症高齢者に対する有効なコミュニケーション方法とその介入について 言語障害学の観点からのアプローチ」京都学園大学『京都学園大学健康医療学部紀要(2)』2017、pp.1-11.

矢野秀典「デイケア・デイサービスにおけるリハビリテーションに関する実態調査」公益社団法人日本理学療法士協会『第50回日本理学療法学会大会 抄録集』2015、p.1145.

伊集院清一、渡辺達正、中山隆右「認知症予防教室におけるアートセラピー --高齢者の生活と芸術療法の接点」多摩美術大学『多摩美術大学研究紀要(20)』2005、pp.186-194.

辻正純、辻美帆「臨床美術(アートセラピー)(特集 認知症の非薬物療法とケア)」日本精神科病院協会『日本精神科病院協会雑誌 36(8)』2017、pp. 810-815.

倉知徹、川北健雄、佐々木宏幸、相良二郎「公立学校と住民主導まちづくり組織の協働による地域交流施設の管理と地域づくりのデザイン/兵庫県播磨町での取り組みを通して」神戸芸術工科大学『神戸芸術工科大学紀要 芸術工学 2011』2011.

南雲まき、堂東稔彦、林津也子、金子亨、緒方李心、佐藤みちる、曾佳恵、永山もも「ふれる・もつ・かんじる：展覧会実践からの考察」東京学芸大学学術情報委員会『東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系 Vol.65』2013、pp.97-119.

吉井隆雄「博物館における高齢者対象プログラム(回想法)とアウト・リーチ活動--高齢者福祉施設への出張美術館(3ヶ年)を事例として(41)9」日本博物館協会『博物館研究』2006、pp12-14.

山崎聖子、柳久子、奥野純子「アートセラピーの変遷と高齢者への適応」日本老年医学会『日本老年医学会雑誌』2008、pp.365-371.

宇野正威「芸術療法—美術療法と音楽療法（特集 認知症の非薬物療法）」日本美術教育学会『美術教育』2006、pp.24-27.

辻泰秀、清水英樹、新實広記、林和貴子「地域における『学校美術館』の実践（1）：『学校美術館』の意義と実践事例」岐阜大学『岐阜大学教育学部研究報告.教育実践研究15』2013、pp.31-44.

稲庭彩和子「ケアの場としての美術館：認知症の方のためのプログラム」全国美術館会議『Zenbi：全国美術館会議機関誌1』2012、ppF-6-9.

山根寛「最近注目されている非薬物療法 リアリティ・オリエンテーションの現状と課題（特集 認知症の非薬物療法の現状と課題：様々な非薬物療法をどう考えていくべきか）」フジメディカル出版『認知症の最新医療：認知症医療の今を伝える専門誌2(4)』2012、pp175-178.

【HP】

日本展示学会 <http://www.tenjigaku.com/> (2019.2.10 最終アクセス)

【法令等】

内閣府「平成30年版高齢社会白書(全体版)」、2018.

中央法規出版編『介護保険六法 平成29年版』中央法規出版、2017.

厚生労働省 老健局高齢者支援課認知症・虐待防止対策推進室「介護保険最新情報 Vol.298」別添1「『認知症高齢者の日常生活自立度』Ⅱ以上の高齢者数について」2013.

厚生労働省「社保審—介護給付費分科会 第142回(H29.7.5)」参考資料4、2017.